

博士学位論文審査要旨

2014年1月18日

論文題目： 地域の文化政策における旅行者の役割に関する研究

学位申請者： 片山 明久

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 井口 貢
副査： 総合政策科学研究科 教授 真山 達志
副査： 総合政策科学研究科 教授 多田 実

要 旨：

本論文は、しばしばこの研究領域においては、ポップでクールと称される現代の高度に情報化した日本社会において、観光という社会現象を、地域文化政策の視点を基点に置きつつ分析し、論考が展開されている。

ただし、上記のようなポップでクールといわれる状況に迎合することなくこれを批判的に捉えつつ、片山氏の独自で創造的な見解が十二分に論及されている。例えば観光という現象を、単なる消費行為・経済的波及効果の創出というステレオタイプで捉える見解に疑義を唱え、ゲストサイドである旅行者自らが、観光の目的と価値を創造していく必要性を強調する。そしてそれが単なる地域経済への波及効果のみとしてではなく、それ以上に地域文化の新たな創造への大きな寄与となるということ、さらにいえば観光という行為を、地域文化の継承と創造の寄与に導くことができない政策のあり方を、本稿は決して容認しない。換言すれば、観光を主体とした従来ありがちな地域振興政策や地域活性化策に対して、一定の批判的視座を片山氏の理性的枠組みの中で確保することを試みている。事例としてその多くは、コンテンツ・ツーリズムやアニメにおける聖地巡礼型観光といったいわゆるニューツーリズムの中におけるいくつかの現象形態が論じられているが、それもまた流行化するトレンドとしての軽薄ともいえる観光現象に対しての一定の留保であることも窺い知ることができる。そのことは、片山氏が導きの糸として大きく援用しつつ、それでいて従来の学問領域の中においては、必ずしも豊かな強調関係の必要性が十二分に頓着されていなかった、文化政策研究と観光社会学研究の接合に彼の関心領域が大きく傾いていることから、その推測は難くない。

この二つの学問領域に関わる先行研究の展開においては、全紙幅のおおよそ三分の一以上の部分が割かれ、それは多様な邦語文献に止まらず、文化政策研究においてはD.スロスビー (David Throsby) らの、また観光社会学研究においてはJ.アーリ (John Urry) らの文献に原書 (英語) と整合させつつ当たり、詳細な文献研究が行われている。文化政策研究においては、従来の研究者サイドでは、十二分に観光研究に対して慮られる傾向が相対的に少なく、また従来の観光研究においても、文化政策研究への視座やその成果が豊かに援用されてきたとは言い難いものがあったが、片山氏の当論文はそうした状況に一石を投じる意味も少なくない。

またとりわけ、時として修辭的ともいえるアーリのディスクールにおいては、単にその邦訳文のみに頼らずに原点に当たる努力も怠りなく進め論述されていることもまた本稿にひとつの厚みを付加しているものである。

さらに上述した事例を表題のみをみると、トレンド化され短時間で消費される軽薄な観光現象

と誤解されるかもしれないが、それは単なる事例研究ではなく（若い研究者には時としてあり得ることであるが）、伝統的な地域の生活文化としての祝祭等との整合性や、あるいはその文化継承との接合について分析する努力も怠りなく展開されている。それはとりわけ、「第5章 アニメ聖地巡礼と地域文化の関わり」および「6章 アニメ聖地巡礼者と地域文化の関係における実証的研究」に色濃く表れている。例えば、第5章においては石川県金沢市湯涌町の古湯である湯涌温泉と湯涌稻荷神社の神事およびその祝祭である「ぼんぼり祭り」の再生への波及効果との関係性が綿密に言及されている。また、第6章においては富山県南砺市城端でかつてはその生活文化の象徴であった「麦端踊り」の再現におけるアニメの影響力を、丹念なフィールドワークと地域文化への共感の念とともに描き出している。ここにおいては、文化現象としてのアニメが有する創造力とその波及効果としての地域文化政策への貢献についての少なからぬ示唆をも内包するものと考えるところである。

こうした状況を精査しながら、いわばヨソモノとしての旅行者を単なるゲスト、そして経済効果を齎すだけの存在として捉えることのみを非を述べつつ、旅行者の来訪地での文化の創造と継承における主体的な役割の展開こそが、地域観光における地域の文化政策の大きな役割と論じ強調したものである。

なお審査委員からは、アニメ聖地巡礼型観光の普遍性、ブームの一過性の問題に関わる質疑等があり、それらについても、片山氏は問題なく応えることができ、そのことが本論文の価値を本質的な部分で損なうものでは全くないことも確認された。

以上の諸点から、地域文化政策と観光政策の間に横たわる視座において、創造型観光という新たな概念を提示援用しつつ、既存研究の中では希薄であった独自性と創造性が本論文の中には多様に展開されていることが認められ、よって本論文は、博士（政策科学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2014年1月18日

論文題目： 地域の文化政策における旅行者の役割に関する研究

学位申請者： 片山 明久

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 井口 貢

副査： 総合政策科学研究科 教授 真山 達志

副査： 総合政策科学研究科 教授 多田 実

要 旨：

片山明久氏の学位申請論文について、2014年1月18日午前10時40分より午前11時40分まで、本学烏丸キャンパス・志高館1階SK118教室にて、公聴会方式による口頭試問を実施した。まず、片山氏自身が約30分間、論文の概要と要旨についてのプレゼンテーションを行い、それを受けておよそ30分間の質疑応答が、片山氏と審査委員の間でなされた。

審査委員からは、地域文化政策と観光社会学の接合に関わる学問的特性や、地域の文化政策と国レベルのそれとの差異、あるいは事例研究の対象として重点が置かれたアニメ聖地巡礼型観光の普遍性や一過性の問題、さらにはソーシャルメディアが恒常化する現代の情報化社会のなかにおける観光マーケティングへの示唆を含む質疑が展開された。片山氏は、何れに対しても理路整然と的確な回答を行った。すでに大学専任教員としての数年の経験を経過し、共著も有する故に当然ではあるが、片山氏の研究能力は十二分であることが確認された。

また、外国語能力については、とりわけ第2章の叙述のなかで、関連の英語文献を広範囲に渉猟し、時として修辭的な文献についてもその理解や参照・引用において問題はないことが確認された。従って、研究に必要な外国語能力も十分なものと判断することができた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 地域の文化政策における旅行者の役割に関する研究

氏名： 片山 明久

要旨：

今日の日本社会は情報社会であると言われている。情報社会とは、インターネットが自由に使用できる環境にある社会である。このような社会が進展する中で、我々が意識する、しないに関わらず、様々な世の中の枠組みが変化している。中でも「商品を取引・消費する」という行為においては、大きな変化が起こっている。これまで商品に対して限定的な情報しか持ち得なかった消費者が、インターネットを介して豊富な情報を得て、相互に参照し合う事が可能になっている。そして、彼らは商品に対する新しい目的や価値を生み出す存在として注目されているようである。観光においてもそれは同様に変化していると考えられ、旅行者自身が、観光の目的や価値を創造してゆく時代が到来しているという論もある。そのような場合、旅行者が生み出す目的や価値が、地域の経済だけでなく文化にまで影響を与えるだろう。一方、地域文化の現状を確認すると、地域文化の存続に必要な担い手の存在と彼らによる常在性の継承の状況には問題があると言われており、喫緊な改善が待たれている。本研究は、これらの地域文化における問題を情報社会の観光や旅行者とを関連付けて考察し、解決の可能性を探るものである。

本研究の構成は以下の通りである。

第1章では本研究の目的と背景を述べた。

本研究の目的は、今日の旅行者の観光行動と地域文化の関係を考察することで、地域の文化政策における旅行者の役割を明らかにすることである。

こうした目的を設定した背景は、以下の通りである。

先に触れたように、近年の情報通信機器の普及に伴って、人々は容易にインターネットを使用できるようになり、消費活動においても変化が見られようになった。そのような情報化の進展は、それに伴って旅行者の性質の変化も引き起こしており、もはや旅行者は「ツーリスト（観光を消費する者）」の役割に固定化されない存在であるということが言える。一方、地域の現状を見ると、近年ではコンテンツを活用した観光振興の動きが盛んである。その狙いは、地域をマンガ・アニメ文化の発信源にすることでブランド化し、経済的効果、まちの賑わい、住民の活気の活性化などを実現しようというものであり、その中で依然旅行者は専ら消費者として位置づけられている。すなわち、情報社会の旅行者の特徴が最も強く現れるはずのコンテンツによる観光振興においてさえも、旅行者は依然として消費者の役割に固定されているという矛盾が見られる。したがって現状では、例えば旅行者が地域の文化的価値創造に主体的に参画したコンテンツツーリズムの事例に対して説明することができない状態である。ここに本研究の問題意識が立ち上がる背景がある。

第2章では、本研究の位置づけを述べ、先行研究の整理を行った。本研究の位置づけを示すためには、まず地域文化における諸問題を示す必要がある。地域文化における諸問題とは、第1には地域文化の担い手の問題である。社会の高齢化による地域文化の担い手の不足という問題は年々進行しており、また全国に広く存在していると言することができる。第2には、地域文化の常在性・多様性が脅かされているという問題である。これは一つには地域文化の担い手の不足という問題の影響があるが、もう一つには文化の「外部性」を重視する傾向がそれに拍車をかけている懸念がある。本研究は地域文化におけるこれらの諸問題を、今日の情報社会における旅行者と関連付けることで、解決に有効な知見を提供するものとして位置づけることができる。

次に本研究の目的に即した先行研究の整理を行った。まず地域文化および文化政策に関しては、「文化政策の主体に関する研究」「文化政策の目的に関する研究」「文化の「外部性」に関する研究」の3点について整理を行った。次に、旅行者と地域文化の関係に関する「ホスト&ゲスト論」に検討を加えた後、今日の情報社会における旅行者の特徴を理解するために観光社会学研究の整理として「コンテンツ概念の整理」、「コンテンツツーリズム研究」、「社会の情報化が価値観に与える影響に関する研究」の3点について整理を行った。そして最後に、文化政策研究の整理から得られた知見を、観光社会学研究の整理を通して得た今日の情報社会における旅行者の特徴から検証するという枠組みで議論を進め、以下の課題を抽出した。1点目は、情報社会の個人に対する配慮不足から地域文化の担い手を外部に求めているという点、2点目は、常在的な文化への注目を地域側のみで実現しようとしている点、3点目は、文化の「外部性」の構造上の問題に対する検討不足、である。

第3章では、本研究の独自性と事例の妥当性について述べた。本研究の独自性は、今日の地域文化における諸問題を、観光（旅行者）と関連付けて解決の可能性を検討するところにある。そしてその結果を以って、先行研究の課題にも応えることにした。その上で、それぞれの問題に対する解決の方向性を以下のように示した。第1の地域文化の担い手が不足しているという問題については、旅行者が地域文化の担い手になり得る可能性を検討し、情報社会が生み出す新しい他者と地域文化の関わりの可能性についても検討する。第2の地域文化の常在性・多様性が脅かされている問題については、旅行者の共感によって地域の常在文化が立ち上がる可能性を検討し、旅行者の参画と共感が「外部性」を制御する可能性についても検討する。またその検討のための事例として、アニメ聖地巡礼を採りあげる。アニメ聖地巡礼者は、今日の情報社会の特徴を色濃く反映している存在であり、彼らのオタク的行動は、先駆的ではあるが、今日では一般化の可能性が存在しているという点からも情報社会における旅行行動の事例としては妥当であると言えた。

第4章では、今日までの観光の変遷と旅行者の情報化を確認し、情報社会において観光の持つ意義と今後の展開を考察した。まず現在の観光がおかれた状況の確認を行った。特に観光におけるアクターの相関関係に関心を置きながら、各時代の観光の潮流を確認した。その結果、今日では「創造型観光」と呼べる旅行者主導の構図が生まれつつあることが分かった。続いて旅行者の情報化を、各種データを検証して確認した。

その上で、このような情報社会において観光がどのような意味を持つことになるのかを考察した。その結果、そこに観光は他者性を持った他者との出会いの機会になるという意味を確認した。またこのような情報社会における観光の展開としては「n次創作観光」と呼ばれる旅行者が創造する観光のあり方が存在することも分かった。

第5章では、アニメ聖地巡礼の事例の検討を行った。まず、アニメ聖地巡礼の発生と現状を確認し、アニメ聖地巡礼者の特徴についての考察を行ったのち、事例の検討を行った。まず、埼玉県久喜市鷲宮、長野県大町市木崎湖、石川県金沢市湯涌温泉、埼玉県秩父市の4カ所について、聖地巡礼現象の発生と展開を確認し、続いてそれらの巡礼現象の特徴について論じて行った。中でも共通して確認できたのは、ファンと地域住民がコンテンツと共に地域文化を共有している構図であった。その展開は各々の事例によって違いが見られたが、ある事例では必ずしも「文化」と呼べるほどに形作られてはいないが明らかに地域の常在性を表している地域の「文脈」が、その構図の中で引き起こされる可能性が示されたり、また他の事例では、地元ファンという中間的なアクターがその構図においても活躍していることが確認できた。

第6章では、富山県南砺市城端を事例に、より実証的な検討を行った。聖地巡礼現象の発生と展開を確認し、続いてファングループの地域の文化活動への参画を検証した。次に、城端に来訪しているファンに対して行ったアンケート調査の結果を分析した。このアンケートは、来訪者の属性、行動特性、興味の指向性、アニメ聖地巡礼に対する考えを把握することを目的としたもの

で、調査結果からは、作品のファンがまちのファンやまちの文化のファンになっている様子や、「古い文化と新しい文化が共存」する魅力を作品をきっかけに聖地巡礼を通して発見していった姿が伺えた。そして総合的な考察を行い、城端では、旅行者（ファンや「有志会」）、地域（住民や行政）、製作者（ピーエーワークス）が、コンテンツと地域文化に敬愛を示し、他のアクターに敬意を示す関係が構築されているということを明らかにして、その関係性を図式化した。

第7章では、本研究の目的である地域の文化政策における旅行者の役割の考察に入った。まず旅行者は、地域文化の「担い手」のひとりとしての役割に適性があるということを、彼らの主体性、思いやりを以って説明した。さらに旅行者は「共感者」としての役割も担い得ることを、彼らが及ぼす効果を4点挙げて説明した。そして本研究の結論として、今日では旅行者は地域の文化政策の主体のひとつであり、その役割は地域文化に対する「担い手」と「共感者」という役割である、また旅行者がこのような役割を以って地域の文化政策に関与することが、文化の「外部性」の制御の可能性を生む、ということ明らかにした。

第8章では、この旅行者の役割を基に、地域文化の顕在化を起点に旅行者の共感と参画が関与する地域文化の充実化モデルを提起し、近年企画されたコンテンツツーリズムを事例にその構造と重要性を論じた。

終章では、本研究のまとめを行い、地域文化、そして地域の文化政策における旅行者に注目した研究は大きな意義があり、今後も継続されるべきであるという点を指摘した。

(3,932 文字)